

羅生門

芥川龍之介

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男の外に誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男の外に誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災いがつづいて起こった。そこで洛中のさびれ方は一通りでない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔（はく）がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて薪の料（しろ）に売っていたと云うことである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸（こり）が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、捨てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代り又鴉が何処からか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾（しび）のまわりを啼きながら、飛びまわっている。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。――尤も今日は、刻限が遅いせい、一羽も見えない。唯、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞（くそ）が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に洗いざらした紺の襖（あお）の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰（にきび）を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めているのである。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は、雨がやんでも格別どうしようも云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から暇を出されたのも、この衰微の小さな余波に外ならない。だから、「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなく、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少なからずこの平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申（さる）の刻下がりから降り出した雨は、未だに上がるけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差当たり明日の暮しをどうにかしようとして――云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を聞くともなく聞いていた。

雨は羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめてくる。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めにつき出した薨（いらか）の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいる違（いとま）はない。選んでいれば、築地（ついじ）の下か、道ばたの土の上で、饑死（うえじに）をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように捨てられてしまうばかりである。選ばないとすれば――下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつもでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける為、当然、この後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は大きな嘔（くさめ）をして、それから、大儀そうに立上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫（かざみ）に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸門の上の楼へ上る、幅の広い、之も丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖柄（ひじりづか）の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚（ひげ）の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、ゆれながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、宮守（やもり）のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出るだけ、平にしながら、頸を出るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの屍骸（しがい）が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の屍骸と、着物を着た屍骸とがあると云う事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その屍骸は皆、それが、嘗（かつて）、生きていた人間だと云う事実さえ疑われる程、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり、手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくろがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾（おし）の如く黙っていた。

下人は、それらの屍骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った（おおった）。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。或る強い感情が殆悉（ほとんどことごとく）この男の嗅覚を奪ってしまったからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其屍骸の中に蹲っている（うずくまっている）人間を見た。檜肌色（ひはだいろ）の着物を著た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その屍骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の屍骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸（いき）をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身（とうしん）の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた屍骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱（しらみ）をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、その老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。寧（むしろ）、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、饑死（うえじに）をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢よく燃え上がりだしていたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許す可らざる悪であった。勿論 下人は さっき迄自分が、盗人になる気でいた事なぞは とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いかなり、梯子から上へ飛び上がった。そうして聖柄（ひじりづか）の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは 云う迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩（いしゆみ）にでも弾かれたように 飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が屍骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は屍骸の中で、暫、無言のまま、つかみ合った。しかし勝負は、はじめから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。丁度、鶏（とり）の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。さあ何をしていた。云え。云わぬと これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼（はがね）の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球がまぶたの外へ出そうになる程、見開いて、唾のように執拗（しゅうね）く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうして、この意識は、今まではげしく燃えていた憎悪の心を何時（いつ）の間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下げながら、少し声を柔げてこう云った。

「己は検非違使（けびいし）の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしよう云うような事はない。唯今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それを己に話さえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになった唇を何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉（からす）の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この女の髪を抜いてな、鬢（かつら）にしよと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しょに、心の中へはいつて来た。するとその気色（けしき）が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ屍骸の頭から奪（と）った長い抜け毛を持ったなり、墓（ひき）のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

成程、死人の髪の毛を抜くと云う事は、悪い事かね知れぬ。しかし、こう云う死人の多くは、皆その位な事を、されてもいい人間ばかりである。現に、自分が今、髪を抜いた女などは、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干魚（ほしうお）だと云って、太刀帯（たちばき）の陣へ売りに行った。疫病にかかって死ななかつたなら、今でも売りに行っていたかもしれない。しかも、この女の売る干魚は、味がよいと云うので、太刀帯たちが、欠かさず菜料に買っていたのである。自分は、この女のした事が悪いとは思わない。しなければ、餓死（えうじに）をするので、仕方がなくした事だからである。だから、又今、自分のしていた事も悪い事とは思わない。これもやはりしなければ、餓死をするので、仕方がなくする事だからである。そうして、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、自分のする事を許してくれるのにちがいないと思うからである。――老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持た大きな面皰（にきび）を気にしながら、聞いているのである。しかし、之を聞いていながら、下人の心には、或勇氣が生まれて来た。それはさっき、門の下でこの男に欠けていた勇氣である。そうして、又さっき、この門の上へ上（あが）って、その老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに迷わなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、殆、考える事さえ出来ない程、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲（あざけ）るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に、右の手を面皰から離して、老婆の襟上（えりがみ）をつかみながら、こう云った。

「では、己が引剥（ひはぎ）をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった椀肌色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだように倒れていた老婆が、屍骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪を倒（さかさま）にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々（こくとうとう）たる夜があるばかりである。

下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでいた。